

放射線科学

遠隔医療元年

石垣 武男

遠隔医療は文字、映像（静止画、動画）、音声など マルチメディアを駆使した通信による医療です。大きな病院にかかった方はだれでもが経験することですが、病院の玄関に入ってすべてが終了して玄関を出るまでには通常とても時間がかかります。まず受付で受診の手続きを行います。これも初めての場合には健康保険証を提示して書類に必要事項を書き込まないといけません。どこの診療科へいったらいいのかよく分からない時はもっと大変です。相談窓口（設置してない病院もある）で受けようとする診療科を教えてもらわないといけません。さて、受付を済ませて診療科にカルテが回ってもすぐに医師の診察が受けられるわけでもありません。20分も30分も受付の前の長椅子に座って順番がくるのをじっと待つこととなります。名前を呼ばれてやれやれこれでやっと診察が受けられると思ったら、診察に必要な予備データのための尿検査、血液検査、レントゲン撮影や看護婦や若い医師による症状などの聞き取り（問診）だったりします。診察が済んでも訴えや症状から診断を下すために血液検査、レントゲン撮影、その他の検査を行うことが多々あります。このためにまた別の階へ行き、必要な手続きをして検査を受けます。検査結果が出るのを待ってもう一度診察する場合もあれば、来週また受診するようになれることもあります。最後に薬が出て会計を済ませます。薬をもらうのにも、会計を済ませるのにも時間がかかります。定期的に診察を受けて、薬をもらうだけ（この「もらうだけ」という表現は適切ではないのですが）でも同じ様な手続きをするので患者にしてみれば結構半日仕事になります。

こういった繁雑な手続きや、書類を持ってうろうろする時間、診察・検査・薬・会計などの待ち時間は短いにこしたことはありません。また、主治医に元気な顔を見せるためにだけに2時間も3時間も時間を費やすのは無駄なことにも思えます。病院での受付、順番待ち、症状などの聞き取り、薬、会計などが家からや職場からできれば手間が省け大変便利です。医師による簡単な診察もテレビ電話形式で出来るはず。自宅でできる尿検査や血圧測定などの結果を伝送して医師に病気の経過の具合を判断してもらうことも可能でしょう。遠

隔医療の目的は色々ありますが、こういったことに利用できれば患者側にとっても病院側にとっても沢山の利点が生まれてくると思います。

通信手段として見た場合、遠隔医療は実験段階をほぼ終了し実用の段階に入りつつあります。しかし、行政上はまだ問題が沢山残っています。医師法では医師が自ら診察しないで治療行為を行うことを禁止しています（医師法20条無診察診療の禁止）。遠隔医療ではテレビ電話形式とはいえ実際に対面しているわけではありません。したがって遠隔医療を公に認めるにはこの法的改正または法解釈の拡大が必要です。これは近いうちに行われそうです。テレビ電話で患者さんの顔つきや、顔色、肌の色艶などを見た場合装置の都合で実際のものとは違ってしまっただけでは困ります。また遠隔医療ではレントゲンやCT画像、胃カメラなどの内視鏡画像を伝送したりしますがこれらの画像が伝送することで変質しては困ります。このようなことについて十分検討して遠隔医療に用いる通信機器、端末などに一定の基準を設ける必要があります。こういった作業も現在急ピッチで行われており、この春ころには概略ができそうです。伝送といっても今はやりのインターネットを簡単に用いるわけにはいきません。インターネットは特に管理者がいるわけではなく自然発生的に拡大したネットワークです。したがって秘密保持が保証できないわけです。患者さんの診療の内容や検査データなど医療記録は完全にプライバシーが守られなければなりません。このためには伝送する間に情報が盗まれたり、或いは故意に手を加えられ改竄されないようにする必要があります。現在このような問題については伝送情報の暗号化の方向で作業が進んでいます。また、わが国では医療保険制度が完備していますが、遠隔医療でも診療行為に伴う診療報酬が支払わなければ実現はしません。この診療報酬化についても実現化に向けて検討されています。

以上述べたように遠隔医療が現実のものとなるのはもうすぐのことであり、行政的対応も1～2年で行われそうです。21世紀に入る前に一部の施設ではシステムができ上がるかもしれません。今年は遠隔医療元年ともいえる年でしょう。しかし最後に残る問題は病院内で誰がこれを専門に担当するのかということです。患者さんからの遠隔医療システムによる医療相談や他病院からの専門的知識の支援といっても一日のうちである時間帯で行われるのであれば可能でしょうが、通信してくる時間が不定では対応できません。遠隔医療を専門に行う場や人の配置を現実のものとして考えないと「絵に書いた餅」となってしまいます。

(名古屋大学医学部教授・放射線医学教室)